

令和元年6月7日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02555

研究課題名(和文) ケンペル研究の新展開 - 日本とドイツの協力による総合研究

研究課題名(英文) A synthetic Reserch of E.kaempfer with German Collaborator

研究代表者

渡邊 直樹 (Watanabe, Naoki)

宇都宮大学・国際学部・特命教授

研究者番号：50167152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：1790年から2年間長崎出島オランダ商館医師として日本に滞在し、手稿「今日の日本」を遺し、18世紀ヨーロッパにおける総合的日本観の形成に寄与したドイツ人ケンペルについて、日独研究者の協働による総合的分析を試みた。ケンペルの観察方法の最大の特徴はヨーロッパ中心ではなく、日本の思想構造をも踏まえた相対的比較の視点にあり、このことは、例えば江戸幕府の「鎖国」政策をポジティブに論じた考察に見て取られる。ケンペルの多元的相対的比較の方法は17世紀の終わりににおける日欧の思想や思考方法の相違よりも、むしろ接点をあらかずくものであり、本研究は、日独協働によるケンペル研究の深化・発展に貢献するものといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：現在、江戸時代の文化・社会の再評価が多様な観点の下で行われている。オランダ商館医師として1690から2年間日本に滞在し、「鎖国論」を含む「ポジティブ」な日本報告(『日本史』1727)を遺したドイツ人・ケンペルの多元的相対的比較の方法を特に分析し、日欧の思想史的接点の証明を試みたこと。

社会的意義：これまでケンペル研究は、日独個別に関心対象を研究する傾向があったが、日独両国研究者が協働して普遍的総合的ケンペル研究を目指すという目的において、ドイツ人研究者Prof. Dr. Detlef Haberlandを招聘し講演会を開催し討論・情報交換ができたことおよび相互協力関係が構築できたこと。

研究成果の概要(英文)：After Kaemper's two-year stay (1690-1692) at the Dutch trading post of Dejima in Nagasaki and his return to his hometown in Lemgo Germany, he left a report titled "Today's Japan" behind. Though the report was not published in Germany, an Englishman named Sir Sloane bought the manuscript and published it in English under the title "The History of Japan" in 1727 in London. The influence of this book on 18th century Europe was profound. Most characteristic of Kaemper's observations on Japanese society is the relative and pluralistic method Kaemper uses that stands neither on the base of the enlightenment thinking nor on that of European Christianity. He tries to understand Edo-era Japan using traditional Shinto-thought and Confucian ideology. His approach is reflected in his essay on the policy of "National Isolation" of the Tokugawa Shogunate. Indeed, the meeting of the ideas contained in these two different worldviews of Shinto and Confucianism would find common ground in Kaemper.

研究分野：ドイツ文学・思想

キーワード：ケンペルの『日本史』 「神・自然・天」の概念 孔子と儒教・朱子学 日本の宗教・神道 多元的相対的比較 「鎖国論」の意義 江戸参府紀行 モンテスキュ・デイドロ・カント

1. 研究開始当初の背景

(1) ケンペルの「日本報告」（英語版『日本史』1727、ドイツ語版『日本の歴史と紀行』1775-77）が日本においては歴史資料としての研究に、ドイツにおいては18世紀ヨーロッパにおける日本観の形成への寄与という歴史的思想史的資料としての研究にそれぞれ重きが置かれ、両者間には大きな乖離が存在した。本研究は、日独の研究交流を通じてこの乖離を相互に理解し、ケンペル研究の深化に資するとともに、新たな総合的ケンペル研究への展望を示すことを基本的課題とした。

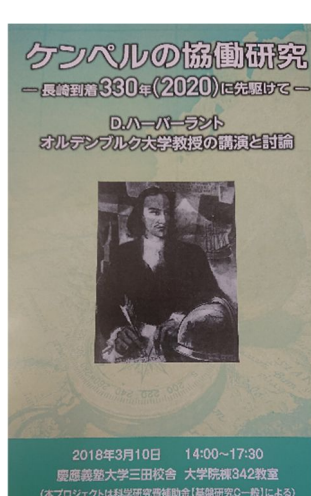
2. 研究の目的

(1) 本研究は、日独両国研究者によって、今日までそれぞれ個別に実施されて来た「ケンペル研究」をドイツ人研究者との交流・協働により総合的研究へと深化・発展させるという目的を有するものであった。両国研究者がこれまでの「ケンペル研究史」を共有し、互いの研究業績を参照・批判・検証・補完し合うことを前提し、両国研究者の協働による総合的、あるいは新たなケンペル像の構築等の成果を目指す試みであった。本研究は、その具体的取組として両国研究者の互いの理解と協力に基づき、ケンペルの思想・思考形式を日本とヨーロッパの歴史的思想史的位相の下で分析し、その接点を見出すことを企図したものである。

(2) 本研究は、したがって日独交渉史研究分野の協力者として沖縄国際大学講師の岡野 薫氏に、またドイツ人協力者として長年ケンペル研究に取り組み大きな業績を上げるとともに2001年から刊行された『ケンペル全集6巻』の編纂者の一人であり、この全集には含まれないラテン語による『廻国奇観』の現代ドイツ語訳に取組んでいるドイツ・オルデンプルク大学教授 Detlef Haberland博士に参加をお願いした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は2方向から進められた。第一にケンペルの一次資料および二次資料の調査・確認・蒐集作業であり、この取組はドイツ・ボン大学をはじめとする大学の研究機関・図書館において実施された。また、ヨーロッパにおけるスペイン・ポルトガルの宣教師による日本報告以外の日本旅行等の記述や著者にかかる関連資料については、それら資料が多く保存されているドイツ・シュレースヴィヒホルスタイン州立Eutin図書館等を中心に調査・蒐集し、ケンペルの足跡等にかかる施設についてはスウェーデン・ウプサラおよびストックホルムにおいて調査を実施した。日本における研究資料については書誌等による情報検索、洋学史学会等における研究者との交流に重点を置いた。



の足跡等にかかる施設についてはスウェーデン・ウプサラおよびストックホルムにおいて調査を実施した。日本における研究資料については書誌等による情報検索、洋学史学会等における研究者との交流に重点を置いた。

(2) 第二に、日独両国の協働研究についてはドイツ人研究協力者であるD. Haberland博士を日本に招聘し、ケンペルに係る講演会と関係者を対象にした公開討論会を開催することにより、日独両国のケンペル研究史の概要を把握するとともに、互いの理解・補完・情報交換に資するところとした。なお、日本におけるケンペル研究史の概要については、岡野 薫氏に講演をお願いした。また、本講演

会・討論会は日本近代史等の多様な分野の研究者・関係者の参加も考慮してD.Haberland博士には英語での講演を、岡野氏とわたくしの趣旨説明は独語で行い、予め日本語の翻訳を付した講演内容の冊子（A4版全74頁、写真参照）を配布した。また、通訳を東京芸術大学講師のククリンスキー・ルーベン氏にお願ひし、参加者の議論への参加を促すとともに時間の有効な活用に資することとした。

講演会・討論会は平成30年3月10日慶應義塾大学にて次のテーマにて開催された。ケンペルの協働研究「長崎到着330年（2020）に先駆けて」D.ハーバーラント博士の講演と討論

4. 研究成果

(1) 研究資料調査・蒐集

D.Haberland博士の紹介により、ボン大学にて大英図書館スローン・コレクション（Sloane Collection）に保存されているケンペル資料のコピーの一部を実見できた。同様に、同大学日本・韓国研究所所蔵のトラウト・コレクション（Trautz-Kollektion）のケンペル資料（前記大英図書館所蔵の写真版）も実見・確認することができた。また、D.Haberland博士の同僚であり、ケンペルの生前ラテン語により唯一刊行された『廻国奇観』のドイツ語訳者であるところのボン大学教授等の紹介を得て、ケンペル研究にかかり情報・意見交換ができた。その際、August Neuhausen博士が提起した「ヒューマニストとしてのケンペル」という解釈が、ケンペルの「日本報告」における多元的相対主義的思考・考察方法との関連を示唆するものとして特にわたしの関心を惹起するものとなった。なぜなら、博士の見解がわたしの、この研究テーマに一定の評価を与える証左となると考えたからである。

(2) D.Haberland博士を招聘しての講演会・討論会

平成30年3月10日に慶應義塾大学にて実施した講演会・討論会により、第一にケンペル研究の意義や研究対象の価値評価において両国研究者の違いが明確になるとともに、双方にとって大変興味深い根源的課題が明らかになった。つまり、日本におけるケンペル研究は、日本史の補完的資料としてケンペルの見た江戸元禄にかかる記述の分析や近代日本の出発点となる「開国」へといたる思想的背景を追究する「鎖国論」の分析に偏り、「学術研究のための探検家」（Forschungsreisender）としてのケンペルの全体像の把握や彼の思想・思考形式についての分析が少ないのに対し、ドイツにおいてはむしろヨーロッパ古典や歴史から見るケンペルの言語・地誌・医学・植物学等への実際的貢献と持ち帰った資料の学術的評価に重きが置かれている。この相違が明確となるとともに、ケンペル研究のためのテキストのさらなる整理と公刊の必要性がともに認識されることとなった。この乖離を埋める努力として、日独協働研究の意義が確認された。

(3) 『廻国奇観』（*Amoenitatum Exoticarum*）等、その他未整理資料の刊行

ルネッサンス後期時代のラテン語で著された大部な『廻国奇観』（Ⅰ～Ⅴ分冊、約950頁）については、D.Haberland博士ら研究者による現代ドイツ語訳が、第Ⅰ分冊まで詳細な注とともにヴォルフエンビュッテル図書館デジタル版にて公開されている。ペルシャの記述が大部分を占めるが、ケンペルはヨーロッパ古典に登場するペルシャの歴史や文化にかんする著書・記述を実

地調査の結果を踏まえ批判的に検証し、現実に見合う客観的報告に重点を置いている。その際、ケンペルの多元的相対的比較の視点がその客観性を担保する条件となっている。

一方、大英図書館「スローン・コレクション」には、現在公刊されているケンペル資料（遺稿・書簡・遺品）以外に、まだ多くの未整理の手稿や未確認の遺品があることが知られている。それら未整理資料を調査し内容を報告する作業は今後とも継続されるべきであり、このことはケンペル研究の深化・発展にとって重要である。ラテン語の『廻国奇観』および「スローン・コレクション」の調査・公開は、ケンペルの歴史的思想史的研究分野に限らず、動植物学、医学、学術の伝播・交流の分野においても意義あるものであることが、改めて確認されたところである。

(4) 新たなケンペル像を求めて

本研究は、ケンペルの「日本」を単なる観察の報告ではなく、彼の「思惟」・「思想」の反映として、人間的なものと自然的なものとを一体的に把握する、日本の「神道」の思想とも共通する「ヒューマニズム」の反映として、そして、ケンペルを17世紀から18世紀啓蒙主義へと展開するヨーロッパの思想史の転回点に位置する「学術研究の探検家」として把握しようと企図するものであった。スウェーデン王の使節団の一員として滞在したベルシャに始まり、インド、セイロン、ジャカルタ、タイ、日本へと至るケンペルのオリエント・アジア志向は、ケンペルの時代のヨーロッパの世界把握の基礎でもあったギリシア古典的世界観のあらわれとも、人間と自然との一体性を直観する東洋的思想へのケンペルの親近性のあらわれとも解釈できる。なぜなら、ケンペルの多様な旅の「報告」は多元的相対的観察方法および思考形式をその特徴として有しており、この思想・思考形式は時間と空間を超える人類普遍のヒューマニズムに基づくと考えられるからである。

(5) 思想史の接点 ―日本とヨーロッパ

ケンペルの日本観察については、確かに多元的相対的視点が決定的に重要である。2年におよぶ日本滞在によって、ケンペルはむしろ日本の伝統的思考形式から、つまり江戸元禄時代の神道と儒教の教学を支配のイデオロギーとする日本の思考原理からヨーロッパを相対化しようと試みている。そして、その思考原理は「人間精神」と「神・自然」との一体性を前提するものであり、その比較の方法は18世紀ヨーロッパの合理主義ではなく、いまだ17世紀の多元的相対的それであり、いわばギリシア古典的世界観に回帰する「人間-自然」関係に起因するそれであった。自然から導き出した客観的法則や秩序ではなく、「人間-自然」との一体化に起因する多元的見方であり、この関係において、たとえばケンペルと江戸時代の医師三浦梅園（1723-89）は同じ立場にあった。三浦によれば、ヨーロッパ人は自然の観点から人間世界を洞察しようとせず、人間の観点から自然世界を分析しようとした、という（『価原』）。換言すれば、両者に共通するのは人間中心の「ヒューマニズム」であり、ここに日本とヨーロッパの思想史的接点があるということができるとはならないか。

<参考文献>

・「ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展」 編集・刊行 ドイツ日本研究所等 1990年

・ A.Neuhausen: Lesebuch Engelbert Kaempfer. Nylands Kleine Westfälische Bibliothek 45.
2014, Köln.

・ 三枝博音編 「三浦梅園集」、岩波文庫 1953

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計5件）

Zur Errichtung eines neuen Kaempfer-Bildes

『宇都宮大学国際学部研究論集』第46号、査読無、2018、137-142

ケンペルの世界観としての日本

『宇都宮大学国際学部研究論集』第44号、査読無、2017、87-96

ケンペルの日本の数奇な成り立ち

『宇都宮大学国際学部研究論集』第42号、査読無、2016、71-87

デジタル版、ケンペルのラテン語による『廻国奇観』の独訳

『外国文学』第65号、査読無、2016、37-51

〔その他〕

講演用冊子：ケンペルの協働研究 - 長崎到着330年（2020）に先駆けて D.ハーバーラント

ト オルデンプルク大学教授の講演と討論 2019、1-74

6 . 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：デートレフ・ハーバーラント

ローマ字氏名：(Detlef Haberland)

研究協力者氏名：岡野 薫

ローマ字氏名：(Kaoru Okano)